



平成20年度

中学生・高校生の国際理解・国際交流論文（中学校の部）

最優秀賞

「国際人への第一歩」

福島大学附属中学校 2年 佐藤 杏美

平和で誰もが安心して暮らせる国際社会は、どうやったら作れるのだろうか。その最良の答えは、いまだに見つかっていない。悲しいことに今日も世界中のあちこちで紛争が起きている。でも、私はこう考えている。私たち一人一人が、他の国の人々と交流し相手を理解し、彼らと深い絆を作れば、解決するのではないかと。人と人の心の結びつきこそ、平和な国際社会に繋がるのではないかと。一人の親友と一つの民族紛争を通して、私はこの答えを出した。

2007年2月。深夜、私の家の電話が鳴った。それはカナダに住んでいるアルバニア人の親友アニーサ一家からで、コソボ自治州が「コソボ共和国」として独立を果たしたという知らせだった。

1997年に始まったコソボ紛争。これは、私の身近で初めて起きた民族紛争だった。コソボには、アニーサの親戚が多く住んでいたのだ。私は彼女から幾度となく彼らの話を聞き、その度に胸を痛め、心配した。「同じ地域に住む民族がどうして憎しみ合い殺し合うのか」「この国際問題に対して、私たちはどうすべきなのか」私の頭の中は、いつもこの問いで占められていた。

アニーサと私は、つくば市で出会った。当時の私にとってアニーサは、物心ついた時から一緒にいる姉妹のような存在だった。アニーサはアルバニア人だが日本生まれで、日本語とアルバニア語の両方を話すことが出来た。

小さい頃はいつも一緒に遊んだ。私はアニーサが大好きで、アニーサの真似をしてアルバニア語でボールを「トッピー」と言って追いかけたり、ぶどうを何度も「ルーシュ、ルーシュ」と言いながら、笑いながら食べたりもした。日本人、アルバニア人という垣根もなく交流した。その後、私は父の仕事の都合で福島市に引っ越したが、交流は続き、「いつか一緒にアルバニアに行こうね」というアニーサとの約束は、私の大切な大きな夢になった。私は英語の勉強を始めた。紛争が起きたのはそんな時だった。

コソボは、セルビアという国の中にある自治州だ。地図上ではセルビアの一地域だが、人口の9割がアルバニア人で、日常生活ではセルビア語よりもアルバニア語が使われていた。セルビアの自治州であったために、政治や経済の要職は少数のセルビア人によって占められ、そのため独立を求める動きが高まった。

なぜ同じ地域に住む者が、民族の違いというだけで争わなくてはいけなくなったのだろうか。そのことについて、アニーサの両親に聞いたことがある。彼らは答えた。「私たちは、

自分たちの国を何度も侵略されている。長い歴史の中で、認められないことがたくさんできてしまった。」と。

国を侵略されるという経験を日本人はしたことがない。想像することもできなかった。でも、民族紛争というのは、今の状態ばかりではなく、何千年もの過去も関係しているということだけは分かった。積み重ねられてしまった長い憎しみの歴史。でも、二つの民族が手を取り合い理解し合える機会はなかったのだろうか。

1997年。コソボ解放軍とセルビア軍との戦闘が激しくなった。そして多くのアルバニア人が難民になり、周辺国へと逃れた。隣国アルバニアにも40万人の人々が押し寄せ、その中にはアニーサの大切な親戚もいた。大きな荷物を背負い、自分の土地を捨てて逃げた人々。家々は破壊され、その前を銃を持って歩く兵士の姿がテレビのニュースでも取り上げられた。悲しむアニーサの姿と重なり、何度も涙がこぼれた。幸いアニーサの親戚は皆無事だったが、この出来事は私に「民族とは何か」「紛争とは何か」「平和とは何か」ということを考えさせることとなった。

コソボ紛争は、千人以上の命を奪い、70万人もの難民を生み出した。多くの子供たちが紛争に巻き込まれた。なんて悲しいことが起きたのか。私たち日本人が出来ることはなかったのだろうか。

つくば時代の思い出として、母から聞いた話がある。私が住んでいた所には、アニーサのようなアルバニア人ばかりではなく他の国の子供も沢山いたそうだ。中国。韓国。リビア。カザフスタン。私はその国の子供たちと手をつないで遊び、一緒に三輪車に乗り、滑り台で遊んでいたという。私たちの間には民族の壁も言葉の壁もなく、あるのはただの「大好きな友達」としての繋がり、母にはそれがとてもまぶしく見えたという。

アニーサが、父親の仕事の都合でカナダに行くことになった時、アニーサの両親が私に言ってくれた言葉がある。「日本は、アニーサのもう一つの故郷。私たちは日本が大好き。」

私はその時、自分の国を好きだと言ってもらえることがこんなにも嬉しいことなのだ初めて知った。私も「私もアルバニアが大好きです。それは、アニーサの故郷だから。」と答えた。

アニーサを通して、私はアルバニアという国を知った。世界中にたくさんの民族がいることも知った。日本が評価される経験も初めて知った。どれも新しい発見だった。

アニーサ一家との交流は、世界から見たら小さな雨の一粒にも満たない。だが、私の心に熱いものを生んだ。雨粒は、集まればいつか大河になるという。国際交流という名の大河が、青い大海になった時、真の「平和な国際社会」が訪れるのではないだろうか。

私たちはもっといろいろな国の人々と触れ合うべきだ。心の絆を結ぶべきだ。それにより、今度は自分の国も愛してもらえる。理解もしてもらえるのだ。国際的に信頼されれば、争う民族の仲立ちも出来るはずだ。

お互いを平等に認め合い、思いやりの心で絆を深め合う。これこそ平和に貢献できる「国際人」への第一歩だと、私は信じている。